

『世界の欲望』の欲望の在り処

－ 合作をめぐる 19 世紀的想像力 －

福田 泰久

はじめに

英文学史において、2 人ないしそれ以上の作者による合作はそれほど珍しい事象ではない。とりわけルネサンス演劇ではよく見られ、研究書も数多い。その一方で、19 世紀の小説・散文に目を向けると、合作の事象自体は継続して見受けられるものの、この時代の合作についての研究は、未だ道半ばであるように思われる。とは言え、ロラン・バルトが「作者の死」という概念を打ち立て、文章を作者の意図から解放されたテキストとして読むよう促したのが 1968 年であったことを思えば、散文における合作行為がそれほど議論の俎上にのぼらなかったことも、当然と言えば当然のことなのかも知れない。だが、こうした新批評的枠組みを脱し、「作者とは何か」(1969)と題する論文のなかで、ミシェル・フーコーはバルトの上記概念に寄り添いつつも、文学作品と作者（の機能）はともに歴史的構築物であるがゆえに、作品の歴史化、すなわち、作品の書かれた時代の思潮や社会的背景を踏まえた読みを行うべきだとした。フーコーのそれにならい、本論文の目的も、ヘンリー・ライダー・ハガードとアンドリュー・ラングによる合作小説『世界の欲望』(1890)の歴史化にある。

ヴィクトリア朝後期からエドワード朝初期にかけての男性作家の合作からなる散文、韻文、さらには科学言説に至る諸言説が、不可避免的に同性愛的傾向を包摂すると指摘するウェイン・コーステンバウムによれば、男性作家による文学的営為としての合作とは、「隠喩としての性行為」であり、それによって生み出された作品とはすなわち、「男同士の性的結合の結果誕生した子ども」(Koestenbaum 3) に他ならない。仮にコーステンバウムの言が正しいと

すれば、ホモフォビアの蔓延する世紀転換期に上梓された『世界の欲望』は、生まれながらにして被傷性を負うことになるだろう。そこで、『世界の欲望』が、わけても合作という行為そのものが、19世紀末のイギリスにおいてどのような意味を有していたのか、本論文はこれらの問題についてホモフォビア言説を通じた限定的な見通しを示そうとするものである。

1. リアリズム vs. ロマンズ

ハガードは合作に縁のある作家であった。1890年にはラングとの合作小説『世界の欲望』を出版、¹ また、ラングと作家ウォルター・ヘリーズ・ポロックは、ハガードの『洞窟の女王』(*She* 1887)のパロディである『彼』(*He* 1887)を出版している。加えて、ハガードの自伝にはロバート・ルイス・ステューヴンソンから合作の誘いがあったことが記されている。『ソロモン王の洞窟』(1885)の感想を述べた後でステューヴンソンは、「2人で一緒にいかがでしょうか？」² とその手紙を締め括っているが、この申し出についてハガードはいささか自嘲気味に次のように回想している。

This ‘deed of partnership’ on the face of it would seem to suggest some scheme of collaboration. Yet I do not think that this could have been the case – for the following reason. I remember that my late brother Bazett, who was afterwards an intimate friend of Stevenson’s in Samoa, told me that someone, I know not who, had written to him suggesting that he and I should collaborate in a story, and that he had returned an angry and offensive answer to the suggestion, as I dare say it was quite natural that he should do. This answer, it seems, had however weighed upon his mind. At any rate Bazett informed me that Stevenson on several occasions spoke to him with deep regret as to his petulant reply. This is all I know, or at any rate all that I can recollect, of the matter. (*TDML I*: 237)

ハガードが述懐するように、結局ステューヴンソンとの合作は実現しなかつ

たものの、この書簡は、後期ヴィクトリア朝の冒険小説作家の間で、合作がある種の文学実践としての地位を確立していたことを窺わせる点で興味深い。

濃淡はあれ、これらヴィクトリア朝後期の冒険小説作家にとっての目下の懸念は、時代を席捲するリアリズム作家の存在であった。³ なかでもハガードの苛立ちは、「[リアリズムが] 作家という気高く誉れ高い職業を恥辱と不名誉へと墮落させる」(“About Fiction” 173) という直截な物言いに見てとれる。「大部分がくだらないもので、生命力の煌めきもない」(“About Fiction” 177) リアリズム小説に対し、ラングもハガードとステイーヴンソンを引き合いに出しながら、冒険小説を含めたロマンスの復権を声高に宣言する。⁴ (女性) リアリズム作家が幅を利かす現状を憂う 2 人が、ロマンスのみならず男性性の復権を託した合作小説こそ件の『世界の欲望』である。邦訳はなく、現在ではほとんど顧みられることのない作品のため、具体的な分析の助けとして、プロットの概要を以下に記しておく。

10 年の漂泊の後、ようやくたどり着いた故郷にオデュッセウスは愕然とする。家は見る影もなく荒れ果て、妻ペネロペは亡くなり、息子テレゴノスの行方も分からない。途方に暮れたオデュッセウスは、かつてスパルタ王メネラーオスから贈られた金の鎧を身に纏い、再び旅路へ赴く。途中アフロディテの神殿に立ち寄ったオデュッセウスは、そこで「世界の欲望」(“The World’s Desire”) を探し出せというヘレネーの神託を聞く。「世界の欲望」とはすなわちヘレネーのことであり、ヘレネーは自らを探し出すようにオデュッセウスに命じたのである。直後、金の鎧を身に纏ったまま眠りに落ちたオデュッセウスは、金目当てのシドン人商人たちに捕らえられ、捕虜としてエジプトへ連れて行かれることになる。だが、シドン人たちの隙をつき、オデュッセウスは窮地から脱する。エジプトへ着いた彼はファラオとその妹であり妻であるメリアムに謁見する。兄であるファラオとの結婚にかねてから不満を抱いていたメリアムは、降霊によって真に愛すべき人物を探り当てていた。その人物こそが誰あろうオデュッセウスだったのである。折りも折り、国中は原因不明の疫病に苦しめられていた。メリアムはハトル＝ヘレネーこそ国に災禍をもたらした人物であるとして敵視すると同時に、ヘレネーはその類稀な美貌によって国中の男を惑わしていると吹聴していた。その話を聞き

つけたオデュッセウスは、司祭レイの制止を振り切ってヘレネーの神殿へと向かう。こうしてオデュッセウスをめぐるヘレネーとメリアマムの間で争いが起こる。ヘレネー側で戦ったオデュッセウスは、その戦いで負った傷によりヘレネーの腕のなかで亡くなり、絶望したメリアマムは火中に身を投げ自害する。

概要から理解されるように、『世界の欲望』は、ホメロスの『オデュッセイア』を下敷きに、ハガードの『二人の女王』(*Allan Quatermain* 1887)でも用いられたテーマである1人の男をめぐる2人の女の争いを描いた歴史冒険小説である。⁵ ラングの残したメモによれば、『世界の欲望』についてステイヴンソンは、「メリアマムに恐れおののき、ぞっとした」(qtd. in *TDML II*: 7)と多少なりとも好意的な感想を寄せていたようだが、ハガードとラングの意図とは裏腹に『世界の欲望』出版後の反響は芳しいものではなかった(Demoor 318)。例えば、1890年に『ナショナル・オブザーバー』に寄せた「文化とアナーキー」と題する書評において、W. E. ヘンリーは「邪で神をも怖れぬアナーキーと文化の寄せ集め」(99)と評し、果ては「芸術的自殺行為」(100)とまで言い切る。こうした過激な表現は多分に私怨絡みであったとは言え、⁶ ラングを失意のどん底に突き落とすには十分であったようだ。思わぬ不評に意気消沈したラングに宛て、ハガードは1907年12月28日に次のような手紙をしたためている。「あなたとまた一緒に本を書ければと思っています。[……]多くの心無い者が『世界の欲望』をこきおろしたために、あなたは少しばかり落胆をしておいででしょうが、それは間違っています。『世界の欲望』は今後も読まれ続けることでしょう」(*TDML II*: 77)。これに対してラングは、「もうこれ以上一緒に仕事をしようとは思いません。[……]あなたお一人でお書きになるよりも、ケチがついてしまいますから」(qtd. in *Lilias Rider Haggard* 207)と、断りを入れている。この返答は、当時寄せられた『世界の欲望』への酷評が、少なくともラングの考える限りでは、「芸術的自殺行為」としての合作という男性作家の文学実践そのものに向けられていたことを匂わせる点で示唆的である。酷評の背景には、『洞窟の女王』で一躍人気作家の仲間入りを果たしたハガードへの妬み嫉みも一部あったようだが、ハガードがいみじくも予言した通り、『世界の欲望』は出版以来絶版に

なることなく、細々とではあるが読まれ続けていることを考えれば、少々行き過ぎた評価であるようにも思われる。批評家たちは何に引っ掛かったのか。私怨を別にすれば、芸術的自殺行為としての男性作家の合作行為と、その所為である『世界の欲望』及びその舞台であるヘレニズム世界という、一見関連性のないこれらの事象に通奏低音として響いているものを、当時の多くの批評家は敏感に感じ取り、難詰したのではないだろうか。そこで、批評家たちが察知したものを同定するため、19世紀後期の同性愛表象を補助線として引いてみたい。

2. オックスフォード運動とヘレニズム文化

19世紀後半のイギリス同性愛文学の秀逸なアンソロジーである『性の異端者』のなかで、ブライアン・リードは、世紀の後半になるにつれ、増殖してくる同性愛言説を大別すると2種類に分類できると指摘する。

By 1870 two contrasted streams of homosexual sentiment were especially noteworthy: one from the Oxford Movement with its undercurrent of emotional friendship as expressed by Newman [John Henry Newman] and Faber [Frederick Farber]; the other from the muscular Christianity of Dr. Arnold at Rugby School, a somewhat inarticulate trend. Although these two streams were opposed, in fact they were joined at the point in a friendship where emphasis is placed on overtones of self-sacrifice, and not on the practical advantages accruing. At this point Dr. Arnold's athletic comradeships, with their socially cohesive values, could interweave with Faber's religious comradeships which justified a kind of promiscuous affection among males. (Reade 29)

ここで語られるのは、同性愛が必ずしも異性愛との二項対立で規定されるものではなく、同性愛言説内部において「男らしさ」と「女らしさ」が相反しながらも共存していたということである。リードが挙げる2つの潮流のうち、

以下、オックスフォード運動に焦点を絞って考察する。

主として国教会の高教会派に属するオックスフォード大学の聖職者たちによって 1833 年に始まったこの国教会改革運動は、推進者の 1 人であるジョン・ヘンリー・ニューマンが 1845 年前後にローマ・カトリックに改宗したことからも明らかのように、そのカトリックへの傾斜によって国教会内部から批判を受けるといった紆余曲折を経ながらも、その後のイギリスの思想風土、文化に多大な影響をもたらした。ニューマンの批判者としては広教会派に属するチャールズ・キングズリーがまずは挙げられる。その批判の鋒先は、「世紀の終わり頃までには嫌疑の対象となり、情熱的な男同士の友情は『道徳的に望ましくないもの』となった」(Nelson 53) ニューマンの独身主義に向けられていたようである。このオックスフォード運動の思想的拠り所がヘレニズム思想であった。

フランク・ターナーによれば、18 世紀中庸以降、ヨーロッパではまずドイツを中心に受容された古代ギリシアの思想がイギリスの知識人や神学者へ飛び火したのは 1780 年代であったようだが (Turner 2-4)、リンダ・ドーリングは、ヴィクトリア朝中期に本格的に導入されたヘレニズム思想の受容後の顛末を次のように紹介する。

The great irony would thus always be that the mid-Victorian liberals, struggling in the face of the apparent powerlessness of classical republican 'manliness' to rescue Britain from stagnation and future decay, would so far succeed in their polemical work on behalf of Hellenism as quite unexpectedly to persuade the late-Victorian homosexual apologists that in Hellenism they themselves would find a no less powerful, no less liberal language, a legitimating counter discourse of social identity and erotic liberation. (Dowling 36)

旧弊イデオロギー構造の代替として、オックスフォード大学ベイリオル学寮のチューターであるプラトン学者ベンジャミン・ジャウエットに代表されるリベラリストによって導入されたヘレニズム思想は、ウォルター・ペイター、

ジョン・アディントン・シモンズ、そしてオスカー・ワイルドら同性愛擁護派によって、同性愛正当化の免罪符として流用された。別言するならば、一方でリベラリストが学生の人格陶冶のために用いたヘレニズム思想を、他方で同性愛者たちは自らの性癖の後ろ盾として曲解したのである。⁷

その同性愛性に意識的であったかどうかはともかく、ヘレニズムを『世界の欲望』の題材にすることを持ち掛けたのはハガードであったようだが(Lilias Rider Haggard 206-07)、先にも述べたように、『クレオパトラ』(1889)はかなりの部分にラングの彫琢が施されている上、そもそもラングは1882年にヘレネー伝を上梓し、79年に『オデュッセイア』、そして、83年には『イリアス』を英訳したヘレニズムに関する専門家であり、双方ともにヘレニズム文化はなじみのある題材であったと思われる。コーステンバウムは、ヴィクトリア朝後期において、そのヘレニズム世界を「隠喩としての性行為」である合作の題材にとることの含意をこう指摘する。

Two men writing together about Greece – a homosexual utopia that Symonds celebrated in his ‘Greek Ethics’ essay – is an act calculated to reassert the masculinity of British fiction and to steal fire back from women writers [. . .]. (Koestenbaum 151)

後期ヴィクトリア朝におけるロマンス作家による男性性復権の動きが、ギリシアを題材とすることにも窺える、とコーステンバウムは述べているのだが、果たして本当にそうなのであろうか。ヘレニズム世界を作品の舞台に措定してしまうことで、復権しなければならないはずの男性性に翳りをきたすことになるのではないだろうか。

3. 「英雄」とは誰なのか？

「同性愛者のユートピア」としてのギリシア及びエジプトを舞台とする『世界の欲望』において、オデュッセウスと2人の女の間の痴情のもつれに端を発する争いがメインプロットであるとすれば、サブプロットでは、司祭レイがオデュッセウスに対して抱く思慕の情に焦点を当てている。すなわち、前

者では異性愛世界を、後者ではホモソーシャル世界をそれぞれ描き分けていることになる。

先述したようにスティーヴンソンは、『世界の欲望』について概ね好評をもって迎えたようだが、ラング宛ての書簡に添えられた詩には、“In stunt and in strife / To gang seeking a wife – / At your time o’ life / It was wrang” (qtd. in *TDML* II: 8) とあるように、その基底を流れる異性愛のテーマには苦言を呈している。ここから、スティーヴンソンがオデュッセウスと2人の女の間の異性愛的関係を描くメインプロットではなく、オデュッセウスとレイのホモソーシャル的關係を描いたサブプロットに力点を置いていたことが窺える。同様に、コーステンバウムも、「ラングとハガードは老齢のオデュッセウスに妻を捜し求めさせる愚を犯した」(Koestenbaum 157) と、スティーヴンソンの主張をなぞり、男女関係をその主題としたハガードとラングの過誤を指摘している。ただし、ラング自身、『世界の欲望』を「女性嫌悪的な本」(Green 129) と評していたことを思えば、件の評価はいささか酷というものであろう。少なくともラングにとってのメインプロットは、女を排除し男同士の関係に焦点を当てたサブプロット、それも、オデュッセウスの視線の先にはつねにヘレネーがいることを考え併せれば、オデュッセウスとレイの関係のうち、オデュッセウスに慕情を寄せるレイに焦点が当てられている。したがって我々は、異性愛関係にホモソーシャル関係を埋め込まなければならなかった理由、オデュッセウスとレイの関係を主題にできなかった理由をこそ忖度しなければならない。

祖国との慣習の違いに戸惑うオデュッセウスの案内役を任されたレイは、オデュッセウスと行動をとる内、次第に彼の人柄と剛勇さに惹きつけられてゆく。レイが抱く思慕の情はテキスト中に散見されるが、とりわけ、オデュッセウスがヘレネーの神殿へ向かうことを決意して以降その傾向は顕著となる。プロットの概要でも指摘した通り、ヘレネーは国に災禍をもたらすのみならず、男を蠱惑し墮落させる「宿命の女」でもある。それは、ヘレネーの神殿へ向かう男たちをひき止めようとする女たちの嘆きからも明らかである。「今や、女たちから大きな泣き叫ぶ声が上がった。彼女たちは恋しい者たちの首に狂わんばかりにしがみついた。その内の何人かは翻意させるこ

とができた。[・・・]だが、そうでない者たちは[・・・]神殿へと駆け上がっていった」(*The World's Desire* 149)。⁸ この直後に交わされるオデュッセウスとレイの会話では、ヘレネーに色めきたつ男と追いつがる女、という男女の構図が反復されている。

‘Surely thou wilt not enter in?’ quoth Rei, clinging to the arm of the Wanderer [Odysseus]. ‘Oh, turn thy back on death and come back with me. I pray thee turn.’ ‘Nay,’ said the Wanderer, ‘I will go in.’ Then Rei the Priest threw dust upon his head, wept aloud, and turned and fled [..]. (149)

さらに、「オデュッセウスを目にすると、彼のところへ駆けつけ、しがみつき、生きて帰ってきたことを喜んだ」(196) レイの描写には、男（オデュッセウス）／女（レイ）の構図が一層明確化されている。このように女性性を内在化するレイは、服装の点においてもその兆候を示す。オデュッセウスへの恋心に身をやつした末、夫であり兄であるファラオを毒殺したメリアムは、それをヘレネーの仕業だと偽り、夫や恋人を奪われた女たちに哀れみを乞う。それを聞いた女たちは、メリアムとともに大挙してヘレネーの神殿へと押し寄せるのだが、その際事情を知らないレイは、この集会の目的を探ろうと「老婆の衣装に着替え」(272)、女たちの列に加わる。神殿のホールに結集したところで、女たちに向かってメリアムが男狩りを教唆するのを聞き、レイは震え上がるのだが、異性装によって身も心も女と化したレイは事なきを得る。

‘Let each search the face of each, and if there be any man among your multitude, let him be dragged forth and torn limb from limb, for in this matter no man may hear our counsels [..].’ Now every woman looked upon her neighbour, and she who was next to Rei looked hard upon him so that he trembled for his life. But he crouched into the shadow and stared back on her boldly as though he doubted if she

were indeed a woman, and she said no word. (275)

ヴィクトリア朝後期に出版された『世界の欲望』に描かれるこうした女性性への接近を、わけても、オデュッセウスとの密接な連帯を示すレイの女性性を、我々はどのように位置づけるべきなのであろうか。それには、この作品の舞台ともなっているヘレニズム世界、とりわけヴィクトリア朝中期に知識人を中心に膾炙していたヘレニズム思想における、理想の男性性の内実を考慮しなければならない。

4. 蔓延するホモフォビア

クローディア・ネルソンは、ヘレニズム思想がヴィクトリア朝中期からエドワード朝初期にかけての児童文学に与えた影響関係を詳述するなかで、ヘレニズム思想が導入されたヴィクトリア朝中期の理想の男性像を次のように指摘している。

[I]n sex manuals and children's fiction alike, in the mid-century years the word usually chosen to encapsulate this androgynous blend of compassion and courage, gentleness and strength, self-control and native purity, was 'manliness.' (Nelson 530)

次第に帝国主義へ傾斜する世論と軌を一にして、ヴィクトリア朝後期の理想の男性像がオデュッセウスを典型とする「勇氣」、「肉体的強靱さ」、そして「飽くなき冒険心」といったもので定義されるとすれば、ヴィクトリア朝中期の理想の男性像は勇氣のなかにも他者への慈愛に満ち、上述の引用にもあるように、しばしば「両性具有的」特質を備えた人物であった。また、ロナルド・ハイアムも、「19世紀を通して、[・・・]『男らしさ』の内実に顕著な変化が見られた。つまり、キリスト教的な男らしさである道徳的な熱心さを理想とするものから、肉体面を強調するものへと変化した」(Hyam 72)と、ヴィクトリア朝中期から後期にかけての男性性の内実の変遷を指摘する。つまり、「ヴィクトリア朝中期の英雄は、後期ヴィクトリア朝では女々しい男」

(Nelson 51) であり、僅か数十年の間で理想の男性像にパラダイム・シフトが生じたのである。したがって、ヘレニズムという舞台設定は、両性具有的なレイを必然的にヴィクトリア朝中期の理想の男性像たらしめる。と同時に、レイの造型は、作品が上梓されたヴィクトリア朝後期における理想の男性像からの決定的な乖離をもたらすだけでなく、現職の国会議員アーサー・クリントン卿を巻き込む一大スキャンダルとなった 1870 年の「ステラ・ファニー事件」からワイルド裁判に至る同性愛表象（とその裏返しであるホモフォビア）を想起させずにはおかないであろう。⁹ また、ヘレニズム世界を描くことがヴィクトリア朝後期の男性性の復権に寄与する、というコーステンバウムの先の指摘も、両性具有的なレイ造型から果たして妥当なものなのかどうか疑わしさを感じざるをえない。

それでは、同性愛の廉で実刑判決を受けることになるワイルドに対して、同時代人、とりわけ冒険小説作家たちはどのような反応を示したのであろうか。女性を排除した濃密な男同士の世界を創造することで男性性復権を目指したハガード、ラング、ストーカー、そしてスティーヴンソンといった作家たちは、1885 年のラブシェア改正法の犠牲となったワイルドに対して、表面的には同情を寄せるものの、その背後には徹底した拒絶、嫌悪感が渦巻いていた。例えば、1888 年 10 月 16 日前後に W. E. ヘンリーに宛てた書簡のなかで、ワイルドはサヴィル・クラブへの推挙をしてくれたヘンリーの厚情に対して感謝を述べている (Holland 362)。同クラブに名を連ねるエドモンド・ゴス、ハガード、ポロック、そして W. E. ヘンリーを含めた他の多くの会員もワイルドの立候補を容認していたようだが、どういう事情からかワイルドの加入は見送られ、以後も決して入会を認められなかった。この辺りにワイルドへの二枚舌的な対応が窺える。¹⁰

問題なのは、男性性復権を急務とするハガードとラングが『世界の欲望』を通じて描く、オデュッセウスに寄せるレイのホモソーシャル的感情とワイルドの同性愛観との間の可逆性にある。ロンドンの中央刑事裁判所、オールドベイリーの被告人席に立ったワイルドは、「その名を語りえぬ愛」とは何かという尋問に対して、臆すことなく次のようにその高邁な所見を述べ上げている。

The 'Love that dare not speak its name' in this century is such a great affection of an elder for a younger man as there was between David and Jonathan, such as Plato made the very basis of his philosophy [. . .]. It is that deep, spiritual affection that is as pure as it is perfect. [. . .] It is in this century misunderstood, so much misunderstood that it may be described as the 'Love that dare not speak its name,' and on account of it I am placed where I am now. It is beautiful, it is fine, it is the noblest form of affection. (Ellmann 463)

裁判所が同性愛行為のその身体的接触を断罪する一方、ワイルドはその精神的側面を擁護することで両者の主張は平行線を辿ったが、「今世紀において同性愛はひどく誤解され、それ故に『その名を語りえぬ愛』などと呼ばれるのかも知れない」というワイルドの弁明によって、裁判に詰め掛けた傍聴席から拍手喝采が起こった、とエルマンはこの引用に続けて記している。だが、その後の歴史が明らかにしているように、こうした同性愛のサブカルチャーは黙殺されることでワイルドの有罪は確定し、裁判を傍聴していない大衆はその後の新聞報道などによって有罪確定という判決のみを知ることになる。マイケル・フォルディもワイルド裁判の受容のされ方がいかに裁判所の壁一枚隔てた内と外で大きく異なっていたかを指摘するように (Foldy 48)、ここでは裁判の真実云々よりも、むしろ歪曲・誇張された裁判報道を不特定多数の大衆が目にすることで、ホモフォビアの一層の増幅に大きく寄与した点を強調したい。そして、『世界の欲望』の不評もまた、ワイルド裁判を極点とする 19 世紀後期に蔓延したホモフォビアと浅からぬ関係がある。

上述のワイルドの弁明は、『世界の欲望』においてハガードとラングが真に語りたかった物語、すなわちオデュッセウスと 2 人の女が織り成す異性愛の構図に埋め込まれたホモソーシャル的構図 — 年長者のレイがオデュッセウスに寄せる愛情 — を正確になぞる。無論、オデュッセウスとレイの間には身体的・性的接触はなく、描かれるのは精神的つながりのみである。だが、それはもはや問題ではない。ヘレニズム思想と同性愛との接点が、そして、ヘレニズム思想に彩られたヴィクトリア朝中期の理想の男性性とヴィクトリ

ア朝後期の理想の男性像との間の決定的な齟齬が、『世界の欲望』の欲望を、ホモソーシャルな欲望へ、さらには同性愛的欲望へとつねに誤読する可能性を開くのである。

註

- 1 『世界の欲望』以外に、『洞窟の女王』と『クレオパトラ』(*Cleopatra* 1889) も合作と言っても過言でないほどラングの修正が施されている。Demoor 317 参照。『世界の欲望』の冒頭の4章はほぼラングの筆によるものであるが、それ以降は、ハガードがアイディアを、ラングが文体の彫琢をそれぞれ担当している。このあたりは Green 129 に詳しい。
- 2 Haggard, *The Days of My life I* 237 を参照。以下、TDML と略記する。
- 3 例えば、詩人アーサー・パチェット・マーティンへの書簡のなかで、ステイーヴンソンはジョージ・エリオットの作風への揶揄を繰り返している。Letters I 323 を参照。
- 4 *Adventure among Books* 280、"Realism and Romance" 690 を参照。
- 5 『二人の女王』は『ソロモン王の洞窟』の続編であり、クウォーターメイン、ヘンリー、グッドのトリオが主要人物として登場する。文明社会への厭世からアフリカを旅する3人は、双子の女王が支配する白人の王国を発見する。そこで、ヘンリーをめぐるニレプタ (Nyleptha)、ソレイス (Sorais) 両女王の間で内紛が勃発し、ヘンリー擁するニレプタ側の勝利で終結する。ヘンリーはニレプタと結婚後、王位につき、クウォーターメインとグッドの2人も王国に留まる。だが、クウォーターメインは戦闘で負った傷がもとでその生涯の幕を閉じてしまう。
- 6 ヘンリーの悪意に満ちた書評には、自身の *Book of Verses* (1888) を、ラングが口をきわめて罵ったことへの意趣返し意図がある。詳しくは Demoor 318 を参照。私情は絡まないものの、ジェームズ・マシュー・バリも "[I]t [*The World's Desire*] is sometimes dull, a failing that we should not find in any book written by Mr. Haggard or Mr. Long alone" (qtd. in Green 135) と述べ、

合作行為には否定的な見解を示している。

- 7 このあたりは、Evangelista 143-48 に詳しい。
- 8 テキストは、Henry Rider Haggard and Andrew Lang, *The World's Desire* (London: Longmans, 1884) を使用した。以下、同書からの引用は頁数のみを記す。
- 9 1885 年の刑法改正の発端は、ストランド劇場から女装して出てきたところを逮捕されたアーネスト・ブルトン（通称ステラ）とフレデリック・パーク（通称ファニー）が、国会議員アーサー・クリントン卿と関係を持っていたことで一大スキャンダルに発展した 1870 年の「ステラ・ファニー事件」であったと言われている。この事件は、既に存在した（男性）同性愛のサブカルチャーの可視化に一役買っただけでなく、ホモフォビアをも可視化させた。その一方で、ワイルドも 1877 年頃にはすでに男色の道に入っており、改正法の出た 85 年にもハリー・マリリアとの逢瀬が確認されている。また、古代ギリシアの同性愛を論じた J. A. シモンズの『ギリシア倫理の問題』が出たのは 1883 年のことであり、70 年代から 90 年代にかけて、同性愛の（再）発見と抑圧が同時進行していたことを考えると、1895 年のワイルド裁判から 1890 年に出版された『世界の欲望』を遡及的に検討することはアナクロニズムではなく、『世界の欲望』と「ワイルド」を極点とするホモフォビアのコンテクストとを対置させることには一定の妥当性があると考えられる。Merlin Holland and Rupert Hart-Davis 267、また宮崎 62-68 にも詳しい。
- 10 Merlin Holland and Rupert Hart-Davis 362 n. 1、また Pocock 79 も参照。

引用文献

Demoor, Marysa. "Andrew Lang's Letters to H. Rider Haggard: The Record of a Harmonious Friendship." *Etudes Anglaises* 40 (1987): 313-22.

Dowling, Linda. *Hellenism and Homosexuality in Victorian Oxford*. Ithaca: Cornell UP, 1994.

Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. New York: Vintage, 1988.

- Evangelista, Stefano-Maria. *British Aestheticism and Ancient Greece: Hellenism, Reception, Gods in Exile*. London: Macmillan, 2009.
- Foldy, Michael S. *Trials of Oscar Wilde: Deviance, Morality, and Late-Victorian Society*. New Haven: Yale UP, 1997.
- Green, Roger Lancelyn. *Andrew Lang: A Critical Biography*. Leicester: Edmund Ward, 1946.
- Haggard, Henry Rider. "About Fiction." *Contemporary Review* 51 (1887): 172-80.
- . *Allan Quatermain*. London: Longman, 1887.
- . *The Days of My Life I: An Autobiography*. Ed. C. J. Longman. London: Longmans, 1926.
- . *The Days of My Life II: An Autobiography*. Ed. C. J. Longman. London: Longmans, 1926.
- Haggard, Henry Rider, and Andrew Lang. *The World's Desire*. 1890. London: Longmans, 1894.
- Haggard, Liliast Rider. *The Cloak That I Left: A Biography of the Author Henry Rider Haggard K. B. E.* London: Hodder and Stoughton, 1951.
- Henley, W. E. "Culture and Anarchy." *National Observer* (1890) : 99-100.
- Holland, Merlin, and Rupert Hart-Davis. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. New York: Henry Holt and Co, 2000.
- Hyam, Ronald. *Empire and Sexuality: The British Experience*. Manchester: Manchester UP, 1990.
- Koestenbaum, Wayne. *Double Talk: The Erotics of Male Literary Collaboration*. NY: Routledge, 1989.
- Lang, Andrew. *Adventure among Books*. London: Longmans, 1905.
- . "Realism and Romance." *Contemporary Review* 52 (1887): 683-93.
- Nelson, Claudia. "Sex and the Single Boy: Ideal of Manliness and Sexuality in Victorian Literature for Boys." *Victorian Studies* 32 (1989): 525-50.
- Pocock, Tom. *Rider Haggard and the Lost Empire: A Biography*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1993.

- Reade, Brian. *Sexual Heretics: Male Homosexuality in English Literature*. NY: Routledge, 1970.
- Stevenson, Robert Louis. *Letters I*. Ed. Sidney Colvin. London: W. Heinemann, 1926.
- Turner, Frank. *The Greek Heritage in Victorian Britain*. Yale: Yale UP, 1981.
- 宮崎かすみ. 『オスカー・ワイルド — 「犯罪者」にして芸術家』. 東京: 中公新書、2013.